

3/27 2013



Japan Music Education Society **News Letter**

第51号

No. 51

日本音楽教育学会ニュースレター

目次

1 会員の窓	
1-1 平成 24 年度全日本音楽教育研究会全国大会長野大会（幼稚園部会） に参加して	2
1-2 平成 24 年度全日本音楽教育研究会全国大会長野大会（小学校部会） に参加して	2
1-3 平成 24 年度全日本音楽教育研究会全国大会長野大会（中学校部会） に参加して	3
1-4 東ウジユムチン旗オルティン・ドー協会の来日	4
2 新刊紹介	
2-1 『卒業式の歴史学』	5
2-2 『新潟〈うた〉の文化誌～人は何故うたうか 越後に響くうたの 原風景～』	6
2-3 『周辺教科の逆襲』	7
3 報告・お知らせ	
3-1 平成 24 年度第 4 回常任理事会	8
3-2 第 12 回音楽教育ゼミナールのご案内	11
3-3 編集委員会報告	12
3-4 選挙管理委員会からのお知らせ	13
3-5 倫理綱領作成委員会からの報告	14
4 事務局より	
4-1 お知らせ	14
編集後記	

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX：042-381-3562 E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

開局時間：月・水・金（9：00～15：00）

1 会員の窓

1-1 平成 24 年度 全日本音楽教育研究会全国大会長野大会（幼稚園部会）に参加して 桜美林大学 木村 充子



2012年11月15日・16日に長野で開催された平成24年度全日本音楽教育研究会(全日音研)全国大会(小・中学校部会大会)の幼稚園部会に参加した。

「高めよう！音楽の確かな力 味わおう！音楽の美しさ 分かち合おう！音楽の喜び」という大会主題の下、さらに幼稚園部会、小学校部会、中学校部会それぞれに研究課題が設けられた。幼稚園部会の研究課題は「感動を共有し 自分なりの表現を楽しむ活動づくり」であった。

信学会昭和幼稚園において行われた幼稚園部会は、まず年長クラスの自由遊びとホームルームの見学から始まり、引き続き、公開保育「单元名：森の音楽会～歌声にリズムを乗せて～」が行わ

れた。

本時の活動内容は「さまざまな楽器を使って友だちと一緒に歌いながらリズム表現を楽しもう」というものであり、ねらいとして「様々な楽器でリズム表現を楽しんできた子どもたちが、『山の音楽家』第2フレーズに焦点を当てリズム遊びをすることで、新しいリズムを表現したり、音を重ねたりして、歌声にリズムを乗せて楽しく表現することができる」が設定された。子どもたちは各々自分の好きな楽器を選び、グループに分かれた。担任の保育者と音楽専科の保育者がそれぞれ各グループをまわり、子どもたちのイメージや表現を受け止め、活動を支えていく中で、子どもたちは自分たちのリズムづくりを行った。その後、グループごとにリズムを発表し、最後に全員で歌いながらリズム表現を行った。

公開保育の後、研究協議が行われ、保育者からの報告に続きフロアからの活発な意見交換もなされた。ともすると「音楽の授業」として捉える学校教育的な見方に傾斜してしまいがちであったが、そのような中であって、助言者として最後にコメントを述べられた今川恭子先生(聖心女子大学)から、本大会における「幼稚園部会」の意義を改めて考えさせられる貴重なお話を伺うことができた。今川先生は今回の研究会に先立ち、何度も本園での日常の保育を観察なさっており、それらを踏まえ、「子どもたちの五感を使った日常のあらゆる経験が素地となって本時の活動につながっていること」「本時は『音楽』に焦点化しているが、その背後にあるものを丁寧にみる必要があること」「本園の子どもたちは、日頃から保育者の声かけや歌、あるいは母親たちのコーラスなど、文化としてのモデルとなる存在の中で育っていること」などを述べられた。

本大会において「小・中学校部会大会」の中に「幼稚園部会」が位置づけられ、幼稚園の公開保育と研究協議の場が設けられたことの意義は非常に大きいと考える。小・中学校における音楽教育を考える前提として、子どもの育ちを乳幼児期からの連続の中で捉えなければならないということを提示してくれたのである。そして、「学校で音楽することの意味」が問い直されている昨今、「保育に音・音楽があることの意味」をしっかりと見つめることがその問いに答える一つの手がかりとなるはずだということを再認識させてくれた。

今後、このような貴重な幼稚園部会での研究成果が広く共有され、縦横の共通理解を深めつつ、文字通り「幼小連携」へと具体的につながっていくことを切に期待したいと思う。

1-2 平成 24 年度全日本音楽教育研究会全国大会長野大会（小学校部会）に参加して 沖縄県浦添市立牧港小学校 平良 その子

本大会では、「高めよう！音楽の力 味わおう！音楽の美しさ 分かち合おう！音楽の喜び」の全体大会主題のもと、「音楽のよさを感じ取り 伝え合い 心がつながる授業づくり」を小学校部会の主題として、研究実践が行われた。

研究の視点として、①音楽を形づくっている要素の働きを明らかにした教材化と題材展開、②音楽のよさや美しさにせまる学び合い、③子どもの学びを支える評価と指導の3点が示されていた。それぞれの研究の視点における手だてとして、①「旋律の特徴・変化」を感じ取

るための「リボン棒（リコーダーの掃除棒に約90mのリボンを付けたもの）、楽曲の仕組みをつかむための「曲の構造図」・旋律の特徴を表す「図形楽譜」、②「3色の付箋紙」を使った学習カード、③言語活動と子どもの姿の両面から評価するための板書と連動した「学習カード」などの工夫がなされていた。

参観させていただいた長野市立裾花小学校眞淵広美教諭による4年生の鑑賞授業は、「旋律の特徴を感じ取ろう」を題材名に、《陽気な船長》、舞踏組曲《ガイーヌ》よりハチャトリアン作曲〈つるぎのまい〉を教材に設定されていた。本時は、「〈つるぎのまい〉の曲想の変化に気付いた子どもたちが、AとBの速さや旋律の違いをリボン棒や図形楽譜を使いながら聴いて確かめる活動を通して、旋律の違いによって曲想が変化することが分かり、感じ取ったり想像したりしたことを言葉で表すことができる」（大会資料より）というめあてで行われた。授業は、「リボン棒を剣に見立てて曲に合わせて振ろう」という教師の言葉かけから始まった。子どもは生き生きと、旋律A・Bのリズムの特徴に合わせて縦に細かく振ったり、なめらかに横に大きく振ったりしながら、楽曲全体の特徴を感じ取っていった。また、教師が、「〈つるぎのまい〉の曲の感じ、情景や様子は、どの音楽のもと（要素）』と関係があるのだろうか」という学習問題や「AとBの曲の感じが変わったのは、どの『音楽のもと』が変化したのか聴いてみよう」という学習課題を提示した後、「旋律の特徴を何の音楽のもとから考えたいか」と問うた。子どもは、必要性を感じている「速度」を視点にあげた。話し合いの場面では、子どもは、「Bの旋律はゆっくり、おそい」、「Bは速度は変わらないが、旋律がなめらかだからゆっくりに聴こえる」、「旋律Aは音が細かい、はげしい、旋律Bはなめらか、やさしい」という、発言をしていた。教師はその発言を拾い、旋律がどのようになっているのか、実際に、子どもにオルガンの音（前もって録音しておいた旋律）で確認させ、それぞれの旋律を歌わせたり、旋律の動きに合わせてリボン棒を動かさせたり、板書で整理したりした。そのことで子どもは、「速度が変わらないのにBがゆっくり、おそく感じたのは、旋律のAとBの旋律の特徴が変わる」ということを発見していった。ふり返りカードによる学習のまとめの場面では、時間が十分に確保されており、子どもが本時の学習で何を学んだのかが見て取れた。それは、「Aは、剣を持って激しく戦っている感じです。音は細かいです。速度は速いです。Bは伸直りしたり踊ったりしたりしている感じです。今までは、Bで速度が変わると思っていたけど、今日の学習で、Bの速度が変わったように感じたのは、旋律がなめらかだからということがわかった」という内容からである。

研究協議では、「旋律の特徴に気付かせるための他の音楽の諸要素（「強弱」）についても触れる方法もあったのでは」という意見が出された。授業者は、「子どもの最初の気付きであった『速度』に重きを置き、指導内容を焦点化することで、子どもの学びが深まる」という説明をされており、筆者は、納得した。

今回の参観を通して、子どもが生き生きと楽しみながら主体的に音や音楽に向き合い、活動したり発言したりする姿が見られたことから、指導内容を焦点化し、子どもの思考に寄り添いながら子どもとともにつくる授業展開をすることの大切さを実感した。4年生とは思えない長野の子どもたちの質の高い音楽の聴き取りができてきていることについても、多くの参観者から感想が寄せられた。

子ども一人ひとりを大切にしたい授業を参観できたことに対し、深く感謝します。ありがとうございました。



▲小学校部会の様子（本文とは別の会場）

1-3 平成24年度全日本音楽教育研究会全国大会長野大会（中学校部会）に参加して 東京都台東区立上野中学校 宮崎 麻里

全日音研全国大会長野大会中学校部会の研究主題は、「音楽の意味や価値を自ら見だし心が響き合う授業づくり」でした。私は普段授業をする上で、生徒が「楽しい」といった音楽の雰囲気を感じ取るだけでなく、その根拠をもてるように、なぜそう感じるのかを音楽の諸

要素から追究する授業づくりを心がけています。しかし、根拠を自ら探すよう促すためには、まだまだ授業に工夫が必要だと感じていました。この研究大会でそのヒントを一つでも多く見つけようと意気込み、参加してきました。

中学校部会の公開授業は二つの会場で計6つ行われました。私は E 会場であった長野市立裾花中学校にて二つの授業を参観しました。まずは、交響詩『フィンランディア』を教材曲とした鑑賞の授業です。曲に込められた作曲者の主張とその表現方法を、感動した要因から探ってみるという題材でした。整理された板書と授業者である細川先生の端的でわかりやすい話し方で、生徒だけでなく私もどんどん授業に引き込まれていました。楽曲を聴いて雰囲気を感じ取ると同時に作曲者が曲に込めた思いを先に考えさせ、次にそう感じる理由を音楽の諸要素の働きと関連づけて考えるという展開でした。作曲者の思いと楽曲とのかかわりをとらえながら考えを深めていく過程が大変参考になりました。また、各自が聴き取った音楽の特徴を、要素ごとに分けてまとめることができるように、付箋を活用していたところに工夫を感じました。この方法ならみんなで意見交換をしながら音楽の特徴を整理しやすいと思いました。付箋の活用だけでなく、聴きたい部分の頭出しがすぐできる音源や生徒が自由に音楽を繰り返し聴けるように班に一つ用意された CD プレーヤー、楽器の名前と形がわかるように写真を掲載してあるスコア譜といった教材一つ一つが工夫されており、教材の準備の大切さを改めて感じました。

次に参観した授業は、最新の ICT を活用し、会場と韓国の中学校を光回線で接続して互いの伝統的な歌唱曲を共に学び合うという内容でした。光回線によって接続されたグランドピアノは先進的かつ効果的で、韓国の生徒が弾いた演奏がそのまま日本にあるグランドピアノで自動演奏のようにして再現されるのです。このピアノは、日本側と韓国側が合わせて歌うときに伴奏として活用され、演奏に一体感を与えていました。日本古謡の『さくらさくら』と韓国民謡の『珍島アリラン』について、生徒は音楽の特徴や演奏をする際に気を付けることを言葉で発表し合いました。韓国の生徒が歌ってくれたアリランは力強く、日本の生徒はじっくりと聴き、楽曲の特徴をつかんでいることが鑑賞後の感想からわかりました。伝統楽器も加わった演奏は双方とも迫力があり、楽器にも興味・関心が向く授業でした。

午後は会場を移動し、ホクト文化ホールにて行われた歌唱のワークショップに参加しました。中学校の合唱曲として定番になっている『時の旅人』(深田じゅんこ作詞/橋本祥路作曲)も教材として扱われ、「この歌詞は何を訴えているのか」を作品に寄り添って解き明かしていく過程を体験することができました。歌って考えてまたすぐ歌って確かめてみるといった流れが非常に自然であり、大変集中して受けることができました。楽曲の一部を利用して発声の練習をする方法や、声部の重なりの変化から作曲者がどんな感情を表現したかったのかを考える方法など、今後の授業ですぐに実践できる技を得ることができ、帰ってから合唱指導に早速取りいれています。

今回の研究大会を通して、生徒が自ら考えるようにさせるためには、考える手立てを丁寧に示すことが大切であると思いました。音楽の諸要素を聴き取ったり、歴史や文化といった知識から考えたり、実際に演奏することで気がついたり、考えを促す手立てはたくさんあることに改めて気が付きました。参加させていただき、ありがとうございました。



1-4 東ウジウムチン旗オルティン・ドー協会の来日

東京学芸大学大学院 策力^{ツリ}格^ラル・東京学芸大学 塚原 健太

2012年11月8日から14日まで中華人民共和国内蒙古自治区の東ウジウムチン旗オルティン・ドー協会が来日し、9日に東京学芸大学音楽・演劇講座主催によるショートシンポジウム・コンサート・ワークショップ、11日に東洋音楽学会第63回大会において特別演奏とレクチャー・パフォーマンスが行われました。オルティン・ドー(長い歌)という我が国に

においては、モンゴル国の舞台化された様式が一般に知られていません。学校用教材などに収録されている映像・録音はほとんどがモンゴル国のものです。

しかし一口にオルティン・ドーと言ってもその歌唱様式は様々であり、内蒙古自治区におけるそれは地域ごとの多様な様式を現在まで継承してきました。特に、東ウジュムチン旗は、遊牧民の生活様式や文化を今なお色濃く残しておりより生活に根ざした本来のかたちで継承されています。東ウジュムチン・オルティン・ドー協会はオルティン・



▲ 東京学芸大学におけるコンサート

ドーの演奏および学術活動を行うために2004年に発足し、主に遊牧民の歌手たちによって組織されています。協会が来日したのは初めてのことで、今回は9名の歌手の来日を実現しました。

東京学芸大学学芸の森ホールで開催されたショートシンポジウム「ウジュムチン・オルティン・ドーの声の諸相」(司会：加藤富美子)では、協会副会長の格日樂陶格陶氏よりウジュムチン・オルティン・ドーおよび協会の概要の報告があり、策力格尔より音楽的な特徴について実演を交えながら研究発表を行いました。最後に遠藤徹氏から、モンゴル国のオルティン・ドーと比較して装飾がなだらかなこと、生活様式の変化などによる舞台化や、漢民族を中心とする他民族の音楽の影響による発声法の変化など激動の中であって、今回来日した歌手たちは古いスタイルを保っており、大変貴重であるとのコメントがありました。コンサートにおいてはオルティン・ドーの演唱を中心に、ホーミー、ヤトガ(モンゴル箏)、馬頭琴の演奏がありました。またワークショップでは、来場者の間に歌手が入って皆で《ナーリン・フヘ・モリ》(細き青馬)を歌いました。

東洋音楽学会の大会では、「ウジュムチン・オルティン・ドーの継承をめぐる一東ウジュムチン・オルティン・ドー協会が果たす役割」と題し、策力格尔より特に「ネール」(祝祭行為)において子どもや若い世代が自然にオルティン・ドーを身につけていくことができるのであり、「ネール」の伝承構造こそウジュムチン・オルティン・ドーの伝承の強さの秘密であること、塚原より学校教育がオルティン・ドー継承に果たす役割などが報告されました。



▲ 東京学芸大学におけるワークショップ

今回の来日の映像や記録を中心に、今後もブログで情報を発信していく予定です。学校現場などでオルティン・ドーの多様性を伝えるためにご活用ください。

☞<http://urtin-duu-u-gakugei.blogspot.jp/>

2 新刊紹介

2-1 『卒業式の歴史学』

有本 真紀 (立教大学)

講談社 選書メチエ, 2013年3月刊, 全264頁,
定価: 1680円(税込み)
ISBN: 978-4-06-258549-1

出版社コメント: 「最高の卒業式」を目指して教師と生徒が努力を重ね、みんなとともに歌い、感動し、涙する「感情の共同体」が達成される――涙の卒業式。この、日本独特と言える「儀式と感情との接合」は、いつ、いかにして生まれたのか。私たちにとって当たり前前の光景の背景には、明治初期以来の学校制度構築の歴史が横たわっている。日本の近代と教育をめぐる、まったく新しい探究!



【目次】

第一章	卒業式のはじまり
第二章	試験と証書授与—儀式につながる回路
第三章	小学校卒業式の誕生
第四章	標準化される式典—式次第の確立
第五章	涙との結合—儀式と感情教育
第六章	卒業式歌—「私たちの感情」へ捧げる歌

明治9年の陸軍戸山学校卒業式、翌10年の東京大学第1回卒業式から現代の小学校卒業式まで、「卒業式」を切り口として人々の感じ方（感情文化・感情規則）の変容や学校的心性の誕生と浸透を儀礼論、記憶論、感情社会学の知見から読み解きます。タイトルは「歴史学」ですが、いつ何が起きたかという政治史・制度史的発想ではなく、歴史社会学や心性史の視点から「ゆっくり変化するものの歴史」、すなわち「私たちの感じ方を支えている力、変えてきた力はどのように働いているのか」に迫ります。なお、基本となるテーマは『感情の共同体』の創出—明治期における小学校卒業式の変容—として、『文化としての涙』（北澤毅編、2012年12月勁草書房刊、第九章）にコンパクトに示しています。合わせてお読みいただければ幸いです。

2-2 『新潟〈うた〉の文化誌～人は何故うたうか 越後に響くうたの原風景～』 伊野 義博（新潟大学）

新潟日報事業社、2013年1月30日刊行
全70頁 1,000円+税
ISBN:978-4-86132-521-2

人は〈うたう〉存在です。〈うたうこと〉は、人間にとって欠かすことのできない行為であり、文化そのものです。しかし、人はなぜ〈うたう〉のでしょうか。いったい〈うた〉とは何でしょう。

本書は、高校生や一般教養向けのテキストとして作成されました。講義形式になっており、各講の最後に設問を設けています。内容の特徴は、新潟（越後・佐渡）の民俗の〈うた〉に着目し、それらの魅力を味わい、文化誌的な側面から考えることにあります。新潟にあるたくさんさんの〈うた〉を紹介するとともに、人間にとって声を出すこと、〈うたう〉ことの意味について、複数の視点を設定し、捉えることを試みます。

登場する〈うた〉の多くは、現代社会において「誰もが知っているうた」とは限りません。時の流れの中で、一瞬の光のように輝いただけのものもあります。また「声にださないうた」やその土地においてこそ、強い生命力となり得ている〈うた〉もあります。その有り様も一様ではありません。

〈うた〉は時に祈りであり、願いであり、共同体を一つにする装置です。また、遊びであり、仕事を円滑にするためのものでもあります。そこには、〈うた〉を伝えてきた人々にとっての様々な意味が存在し、一般的に賦与される、楽しさや辛さといった感情表現や音楽性・芸術性といった枠組みだけでは括ることのできない、多様な価値が息づいています。これらを学ぶことにより、人が〈うたう〉ことの本来の意味や機能に立ち戻り、深く考え、未来の音楽教育を探ることができると考えています。構成は、以下のようになっています。

- 第1講 〈うた〉その範囲～越後の昔ばなし～
- 第2講 〈うた〉をつかまえる～地蔵様まつりのうた～
- 第3講 声のちから～となえごと・岩船祭りの木遣り～



- 第4講 変容する〈うた〉～十日町の子もりうた～
- 第5講 宴のうた～天神ばやし～
- 第6講 仕事のうた～酒造り唄～
- 第7講 楽器のうた～佐渡鬼太鼓・村上祭りのお囃子～
- 第8講 舞のうた～能生白山神社舞楽・糸魚川天津神社舞楽
- 第9講 仮面のうたごえ～村上市大栗田のあまめはぎ・旧能生町大神社神楽～
- 第10講 雪国のうた～雪あそびのうた・しみわたりのうた～
- 第11講 消えたうた～新潟盆踊り・新潟甚句・新潟下駄総踊り・内野盆踊り～

2-3 『周辺教科の逆襲』

小松佳代子（編）西島央・上野裕一・有賀康二・赤堀博美・工藤和美（著）

株式会社 叢文社，2012年12月刊行，全208頁，定価1300円+税

ISBN 978-4-7947-07000

【目次】

- 第1章 音楽—学校に音楽を取り戻すために—
- 第2章 美術—自己と世界の接面—
- 第3章 体育—視点の二重化—
- 第4章 家庭科（衣—内なる自分・理想の自分の探究—；食—いのちを作る—
；住—学校はもう一つの大切な住居—）
- 第5章 まとめ—「周辺教科」を学ぶ意味—
- 参考資料 戦後における各教科時間数の変遷

『周辺教科の逆襲』—この極めてインパクトのあるタイトルに惹かれて本書を手にする読者も少なくないだろう。学校教育における周辺教科，すなわち音楽・美術・体育・家庭科の存在意義を問い直し，ときに教科の枠を超えながらその可能性を多角的に論じ，そして再び学校教育の中に正当に位置づけようとするのが本書の試みである。

本書の編者，小松佳代子氏および著者の一人，西島央氏と私は「芸術が育てる力」についての研究会で活動を共にしている。主に美術と音楽に携わる者が集まり，芸術活動の本質，芸術教育の根幹にせまろうと，それぞれ専門的な立場から意見交換して考察を深めている。得てして学校教育の中では周辺に追いやられてしまう美術と音楽。それぞれの教科の必要性和重要性は身を以て実感しつつも，客観的で説得力のある答えがなかなか導きだせないもどかしさを抱えている。なぜ学校で音楽や美術を学ぶ必要があるのか，学校で教えるべきことは何か。こういった共通の問いが我々の研究会の基盤にある。

本書は5章で構成されている。教科ごとに一つの章が割り当てられ，最後の章では，周辺教科の概念成立の経緯をまとめたうえで，「周辺教科を学ぶ意味」が総括的に論じられている。各教科で少しずつ語り口は異なるが，共通しているのは，「感性」「身体的感受性」「感覚」「体験」などの「身体的な学び」がキーワードになっていることである。ひらかれた感覚と感じる身体を通して，自分の内面を問い直し，他者や周りの環境世界との相互作用によってさらに自己の内面世界が豊かになっていく——いわば循環的な学びであり，自分の感覚で捉えたことと，抽象化された知とを結び合わせていくことが要となる。このような身体と思考の結び合わせについて，教科ごとに具体例を挙げながら様々なレベルで論じられている。例えば第1章で「音楽」について論じた西島氏は，我が国で歌い継がれてきた歌に着目し，実際に歌ったり聴いたりすることが，五感を通して歌詞の世界を実感したり，自分では気づきにくい感覚や言葉で表しにくい感情に気づいたりすることにつながると述べている。そのような歌詞世界と現実世界，そして自己の内面との循環的な学びの積み重ねが，感性を豊かにしていくのだろう。人にとって音楽とは何か，なぜ音楽を学ぶのか。そんな根本的な問いへの一つの答えが隠されているように思う。

編者は，そうした身体や感性を通した学びを，いわば人間の「体幹」を育てることだとしている。それゆえ本書は，「周辺教科」を持ち上げて「主要教科」と対立させようとするものではなく，「周辺教科」の学びを通して学校教育，さらには人間形成について広く問いなおそうとする趣旨で編集されている。

全体を通して学術的裏付けを丁寧に提示しながらも，決して難しい本ではない。各章の分

量も適切で、それぞれの教科の専門家や研究者だけでなく、幅広い読者にとって読みやすい本となっている。何より、「周辺教科」の次なる地平がみえ、未来の教育への希望を感じさせてくれる。これから教壇に立とうとしている人や教える立場・学ぶ立場の人など、様々な立場の人にぜひお薦めしたい。
執筆者：山原麻紀子（東京家政学院大学）

3 報告・お知らせ

3-1 平成 24 年度第 4 回常任理事会

日 時：平成 25 年 2 月 23 日（土）14：00～17：30

場 所：聖心女子大学 教育学科会議室

出席者：加藤，有本，今川，伊野，今田，小川（記録），島崎，寺田

【報告事項】

1 会務報告

平成 24 年 10 月 7 日以降の会務報告は以下の通りである。二重線以下は、今後の予定。

10月7日・8日	日本音楽教育学会第43回（東京音楽大学）大会
10月7日	平成24年度総会（東京音楽大学）
12月7日	倫理綱領作成委員会（東京芸術大学千住キャンパス）
12月26日	『音楽教育学』第42巻第2号，ニュースレター第50号発送
平成25年 2月8日	倫理綱領作成委員会（東京芸術大学千住キャンパス）
2月17日	平成24年度第4回編集委員会（東京芸術大学上野キャンパス）
2月23日	平成24年度第4回常任理事会（聖心女子大学）
3月29日	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.10-No.2，ニュースレター第51号発送

2 会計報告

(1) 第43回大会（東京音楽大学大会）会計報告

下道委員長の資料に基づき、今川事務局長から会計報告がなされ、本部に70万円返金することが報告された。あわせて、現在『収支決算報告書』の中で使用している費目名：「学会本部からの準備金」「学会本部への返金」の名称について、より分かりやすい名称にしたかどうかとの意見が出され検討したが、現行のまま、引き続き使用することとした（11頁に収支決算報告書を掲載）。

(2) 日韓音楽教育ワークショップ会計報告

水戸委員長の資料に基づき、今川事務局長から会計報告がなされた。「当日働いた委員への参加費返金」については、実行委員として諸雑務に従事していたため、ワークショップに参加できなかった分であるとの報告がなされた（11頁に会計報告書を掲載）。

(3) 平成24年度会計中間報告

島崎理事から年度会費をまだ払っていない会員からの会費納入、及び例会運営費の残金返却などが順調に行われれば、ほぼ予算どおりの収入が見込めること、支出もほぼ予算内であることなど、全体として概ね予定通りであることが報告された。さらに、「平成25年度学会基金」の中に「学会賞賞金」（5万円）を入れて、次年度の総会で了承を得る予定であることが確認された。

3 各委員会等報告

●編集委員会

尾見委員長の資料に基づき、伊野理事から報告された（関連記事を12～13頁に掲載）。(1)原稿依頼の際に「大会時において、大会プログラムの内容に変更があった場合は、大会報告の原稿の中で『公式記録』として、変更内容を付記する」旨、明記してはどうか、(2)個人発表との差が大きくなっているので、共同企画の報告頁数を減少する方向で検討してほしい、(3)提案された『音楽教育実践ジャーナル』の締切日だけでなく、『音楽教育学』の締切についても検討し、本年5月の理事会で承認を得られるよう準備を進めてほしいといった意見が出された。

●広報委員会

小川委員長よりニュースレター第51号の締切について報告がなされた。

●将来構想ワーキンググループ

水戸・北山理事からのメールに基づき、今川事務局長から「地区制度の見直し」についての提案がありさまざまな意見交換がなされたが、これについては引き続き検討することとなった。

●音楽文献目録委員会

木間委員の資料にもとづき、今川事務局長から、音楽文献目録第40号の登録文献数は1160、印刷部数は400部であったこと、来年度の助成金辞退の申し出が1件あり、花王文化財団へ助成申請をおこなったことが報告された。あわせて、加藤会長から、長野麻子委員の辞任と残りの任期を福田裕美委員に引き継ぐことについて報告があり、了承された。

【審議事項】

1 第44回大会について

日程：平成25年10月12日（土）・13日（日） 会場：弘前大学（東北地区）

(1) 大会実行委員会から

今田理事から以下の事項が報告され、了承された。

・大会実行委員会委員長 今田 匡彦 事務局長 石出 和也
副委員長 浅野 清

委員 武内 裕明 小野 寿文 工藤 雅之 木村 貴子 前田 美樹
寺田 貴雄 小林 美貴子 川口 明子 橋本 智明 杉田 政夫

あわせて、青森県コンベンションビューローから助成金（弘前市内の宿泊施設に100泊で30万円）を受給する予定であること、50周年記念会館（みちのくホール）が、295名程度収容できること、懇親会は、予定していた生協食堂が改修工事中になる可能性が高いため、市内のホテルで開催できないか検討中であること、今回の大会は教育学部附属国際音楽センターとの共催になるため、大会実行委員会企画シンポジウムのテーマは本年5月の理事会までにMLで検討することが報告された。

(2) 企画担当理事から

(2-1) プロジェクト研究について

伊野理事から資料にもとづき、プロジェクト研究2「社会へのまなざし、社会からのまなざし」の説明がおこなわれた。倫理綱領、道徳と音楽、学習指導要領のしぼり、「社会」の定義についてのさまざまな意見が出され、以下のことを柱にしながら、さらに内容を充実させることが了承された。

- ・研究成果が社会にどのように還元されているのかという根本の問いに向き合う。
- ・音楽教育学は基本的に「応用」の学であるが、その応用の部分について意見交換をおこなう。
- ・子育て支援、ポータルサイト、他学会（たとえば赤ちゃん学会）の活動を参考にする。
- ・活動レベルでの具体的な話を交えて成果を可視化して示す。
- ・苦言を呈するような現場教員を巻き込んでいいのではないか。

さらに、プロジェクト研究1「音楽教育学における『記録』」については、寺田理事から資料にもとづいた説明があり、了承された。

(2-2) 日程、研究発表の割り振り等について

寺田理事から、概ね従来通りの日程を予定していることが報告された。

(2-3) 研究発表応募要領について

倫理チェックリスト（現行のもの）が提案され了承された。また、申込み後の内容の変更は受け付けないこと、発表は筆頭発表者として1件、筆頭以外で1件の計2件であること、肩書きについての記載は現行のままとし、「元」を認めることが確認された。注意事項の文案は「口頭発表、共同企画それぞれ筆頭発表者（代表者）となれるのは1件のみです。筆頭（代表者）・連名にかかわらず、1人が発表できる件数は口頭発表と共同企画をあわせて2件を上限とします」となり、了承された。

(3) 発表と参加受付業務について

今川事務局長から、資料に基づきJTBの「Webエントリーシステム AMARYS」の提案がなされた。学会事務局のかなりの部分を外注できること、経費節約の一助になるのではないかと提案により、採用する方向で了承された。

2 第45回全国大会について

加藤会長より、聖心女子大学での開催（2014年10月25日・26日）について確認されたことが報告され、了承された。

3 倫理綱領作成委員会から

加藤会長から、資料に基づき説明がなされた。本年5月の理事会で原案を提示するため、審議をする時間を十分とりたいとの提案がなされ、資料を持ち帰りMLで意見交換をすることとなった。

4 音楽教育ゼミナール（夏期ゼミナール）について

今田理事から、英語で発表する際の具体的な不安を取り除くようなゼミナールにしたいとの趣旨が提案され了承された。あわせて、柴崎氏から有益な情報提供があったこと、1日目は講演：「英語で発表する意義」と国際会議での発表時の問題点の整理をおこない、2日目は参加者を対象としたワークショップ（パワーポイントの作成、質疑応答への対応等）を予定していることが報告された（11～12頁に関連記事を掲載）。

5 会則改訂について

水戸・北山理事からの資料に基づき、加藤会長より説明がなされた。上記3と併せて、資料を持ち帰りMLで意見交換をすることとなった。本年5月の理事会提案の際は、「会則改訂」「倫理綱領」の順で提案することが確認された。

6 教育学関連学会連絡協議会について

加藤会長より資料に基づき説明がなされ、「参加」の方向で進めることが承認された。

7 会員情報管理について

今川事務局長より、現在 Web 上でおこなっているデータベースが少し重くなっているため、重複している項目（「情報公開の可否」項目）を削除したいこと、そのために、あらかじめ「個人情報の取り扱いについて」で周知したいことが提案され承認された。

8 新入会員及び退会会員について

今川事務局長より、提案され承認された（以下の表を参照）。

<平成25年度第1回常任理事会／第1回理事会の予定>

5月19日（日）13時～／14時半～ いずれも立教大学12号館で開催されることになった。

新入会員（平成24年10月6日以降）：22名

特別会員（平成24年10月6日以降）：1名 申し出退会者・・・2名

【平成24年2月20日現在 正会員数：1518名

学生会員数：2名 特別会員数：3名】

◆お知らせ◆

今年で第21回を迎える「国際コダーイシンポジウム（IKS）」が、7月29日から8月2日まで、コダーイの生地、ハンガリーのケチケメート市で行われます。テーマは「21世紀—世界的な挑戦の中での音楽と音楽教育」。この統一テーマのもと、4日間、「コダーイの芸術的・学術的業績」、「幼児期の音楽教育」、「学校音楽教育と合唱」、「教員養成」の各観点から、毎日、基調講演、音楽指導のデモンストレーション、発表、ワークショップ、ディスカッションが帯で組まれています。一日の始まりは参加者一同が会しての合唱で、一日の終わりはコンサート。コダーイの教育理念である「世界の音楽作品の傑作を人々の財産にすること（*Music for everyone*）」に向かう、幼児から教員養成までの各段階の音楽指導に実際に提示されます。この記事をお読みくださる頃には、詳細なプログラムがIKSのホームページに載ります（ケチケメートの町をコダーイの音楽に乗せて紹介するYouTubeも必見）。今年はハンガリーの歴史と文化と音楽を楽しみ、「世界的な挑戦の中での音楽と音楽教育」を考える夏にしませんか。（国際コダーイ協会会員 尾見敦子）

収入の部			支出の部		
費目	金額(円)	備考	費目	金額(円)	備考
学会本部からの準備金	700,000		懇親会費	463,581	
広告代・ブース代	639,370	広告13社=379,370円	お弁当代	67,010	
		ブース13社=260,000円	広報費	121,425	チラシ・ポスター デザイン・印刷費、雑誌掲載費、ホームページ作成費
臨時会員参加費 両日	170,000	5千円×34名	実行委員会企画関係費	197,750	シンポジウム講師謝金、調律代、ワークショップ講師謝金
臨時会員参加費 1日のみ	156,000	3千円×52名	学生アルバイト代	473,000	
臨時学生会員参加費 両日	75,000	3千円×25名	施設費	159,600	
臨時学生会員参加費 1日のみ	74,000	2千円×37名	通信費	12,590	
懇親会費	550,000	5千円×110名	実行委員会関係費(宿泊費、会議・準備費)	95,800	
利息	33	8月20日付	記録費	35,150	
通帳作成時の入金	1		雑費	38,497	
収入合計	2,364,404		通帳作成時入金の返金	1	
			学会本部への返金	700,000	
			支出合計	2,364,404	

↑平成24年度 日本音楽教育学会第43回大会
(東京音楽大学大会)収支決算報告書

◆収入の部			◆支出の部		
費目	金額(円)	備考	費目	金額(円)	備考
・ゼミナール基金20万 ・国際交流基金10万 ・プラス補正予算5万	350000		・施設使用料金	0	・明治学院大学の好意により施設使用料金なし
・参加費	168000	一般 ¥4000×33名=132000 学生 ¥2000×18名=36000	・韓国からのゲスト 交通費・謝礼	190270	・会長(交通費¥50000)、チェ先生(交通費¥50000、謝礼¥10000)、パク先生(交通費¥50000、謝礼¥10000) ・空港(成田・羽田)へお迎えのための交通費(¥15250)、ホテルへのタクシー代(¥1420) ・歌舞伎チケット1枚¥3600
・懇親会参加費	84000	¥4000×21名=84000	・日本人講師など 謝礼	40000	・根本先生(¥20000)、助演者(¥10000) ・和田先生(¥10000)
・タンソテキスト代売り 上げ	14100	¥300×47冊=14100	・通訳代	47380	・通訳: ¥40000(日給¥10000×留学生2名×2日間)、交通費¥7380(事前打ち合わせ、当日2日分)
・利息	17		・アルバイト賃金など	32720	・当日受付1名: ¥1600(時給¥800×1h×1名×2日) ・会場設営・ビデオ撮影2名: ¥31120(時給¥800×8h×2名×2日、交通費2日分¥5520)
収入合計	616117		・懇親会	73888	・ケータリング代
			・弁当代ほか	25150	・韓国人ゲスト8名、実行委員11名、アルバイト2名、通訳2名
			・実行委員交通費、 宿泊費	154230	・実行委員12名分の交通費: ¥127630 会議5回分、遠方からの委員の交通費(宮崎、愛知) (都内の場合往復一律¥1000、その他は実費分) ・遠方からの委員の宿泊費: ¥26600(2名、4泊分) (一泊上限¥7000)
			・当日働いた委員への 参加費返金	15000	・¥15000(若手委員5名分、各3000円ずつ)
			・会議費・雑費	23803	・印刷用紙: ¥1228 ・ゲスト子ども用土産: ¥2096 ・会議時茶菓代、ペーパーカップなど: ¥3752 ・当日控入室用茶菓代 ¥2315 ・文具、ゴミ袋など: 522 ・銀行手続、振り込み手数料など: ¥1780 ・郵送料: ¥12110
			・予備費	13676	・学会本部へ送金 (¥13676円を送金、利息分3円は別途郵送。)
			支出合計	616117	

平成24年度日韓ワークショップ会計報告書→

3-2 第12回音楽教育ゼミナールのご案内

第12回音楽教育ゼミナールは、「2本立て」のプログラムです。

A：英語で研究を海外に発信しよう！

B：最先端の授業研究を学ぼう！

◆開催日：平成25年(2013年)8月24日(土)～25日(日)

◆会場：立教大学

第12回音楽教育ゼミナール(立教ゼミナール)は、A B 2本立てのプログラムが設定されています。国際的に開かれた若手研究者を支援する「英語で研究を海外に発信しよう！」と、実践者と研究者がともに学び合う「最先端の授業研究を学ぼう！」です。2本のプロ

グラムの趣旨や概要は下記のとおりです。

学校や保育等の現場にかかわる実践者、若手に限らない研究者、音楽教育を学ぶ学生、あるいは他専攻の学生……どちらかのプログラムを選び、ふるってご参加ください！！

なお、詳細なスケジュールや参加申し込みの手続き等につきましては、学会ホームページや4月に立ち上げるゼミナールホームページでお知らせいたしますのでご覧ください。

A：英語で研究を海外に発信しよう！

国際交流委員会では今回のゼミナールを充実した内容にするために、非英語圏の研究者が国際学会で発表する際にどのような不安があるかを約1か月間モニタリングしました。その結果、ライティングを含めたアカデミック英語の使い方、プレゼンテーションの構成、質疑応答時の対応、休憩時のコミュニケーションなどについての不安が多く寄せられました。

今回のゼミナールではこれらの不安を解消すべく、1日目は非英語圏出身で英語での発表経験が豊富な研究者に英語で発表することの意義や楽しさについてお話し頂くとともに、参加者からの質問について時間をかけてディスカッションすることで少しでも英語への苦手意識解消につながれば、と考えています。

また2日目は、柴崎かがり委員（Roehampton University）に協力頂き、参加者の研究内容を実際に持ち寄り、それらを英語のプレゼンテーションに仕上げるまでのワークショップの開催を予定しています。

B：最先端の授業研究を学ぼう！

講師：河邊貴子（聖心女子大学）、藤江康彦（東京大学）

前回の神田ゼミナールの成果をさらに発展させるために、「授業研究」をはじめとする様々な実践研究に役立つ情報の交換、研究方法の追究を目指します。「最先端」と銘打ってはいますが、流行の手法を追うばかりではなく、貴重な実践研究の事例から授業研究の在り方を問い直したり、方法論を学んだりすることが眼目となります。

内容は、講師による2つのレクチャーと音楽科授業研究の実践から構成されます。

河邊貴子氏のレクチャーでは、基本的な理論を踏まえるドキュメンテーションの蓄積に関して研究が進んでいる保育のフィールドの研究事例を紹介いただきます。藤江康彦氏のレクチャーでは、授業研究の動向や質的研究の方法論などを学びます。

音楽科授業研究の実践では、小学校の音楽づくりなどの実際の授業を取り上げ、ディスカッションやグループワークを展開します。音楽科の授業実践から、またそれを素材としたディスカッションやグループワークを通して様々なことを専門や立場、年齢をこえて学び合いたいと思います。

ゼミナール実行委員一同（今田匡彦・疇地希美・小川容子・柴崎かがり・水戸博道・石井ゆきこ・今川恭子・権藤敦子・佐野靖・塚原健太・村上康子）*新たに実行委員として塚原健太会員が加わりました

3-3 編集委員会報告

編集委員会委員長 尾見 敦子

本年度第4回編集委員会は、2013年2月17日(日)に東京藝術大学で開催されました。委員会での報告、協議内容は以下の通りです。

1. 『音楽教育学』・『音楽教育実践ジャーナル』編集過程の総括および進捗状況の報告
担当編集委員から以下のことが確認された。

1) 『音楽教育学』42巻2号

大会報告は掲載件数が非常に多かった。大幅な入稿の遅れ、校正時の原稿の新たな修正等の問題が起こった。担当部署の連携と情報の共有により、最終的には無事発行となった。

2) 『音楽教育実践ジャーナル』vol.10-No.2

特集テーマ「音楽教育におけるアウトリーチを考える」はスケジュール通り進み、現在二校段階に入っている。3月22日に納品予定である。

3) 『音楽教育学』43巻1号は6月末日発行予定、『音楽教育実践ジャーナル』vol.11-No.

1（特集：音楽教育とジェンダー、投稿締切は3月15日）は8月末日発行予定で、編集作業が進行中である。

4) 『音楽教育実践ジャーナル』vol.11-No.2 (特集:音楽教育と電子テクノロジー, 投稿締切は9月15日)は, 誌面の構成を進めているところである。

2. 投稿論文の状況

『音楽教育実践ジャーナル』への新規投稿論文は2本で, 審議の結果, 2本とも不採択であった。『音楽教育学』へ新規投稿の「研究論文」は13本で, 審議の結果, 1本が採択, 1本が再査読, 他は不採択であった。再査読となっていた1本が, 採択となった。『音楽教育学』43巻1号に2本が掲載予定である。

●音楽教育研究におけるルールについて

今回の委員会で, 引用であっても, 著作者人格権のうちの同一性保持権の侵害にあたるのではないかというケースがありました。投稿時のチェックリストにある, 「写真等の使用にあたって権利者, 被写体となった人(またはその保護者や責任者)から投稿・公刊の承諾を得ている」, 「楽譜・図表・図版その他の著作権, 著作権に配慮している」に関して, 会員一人ひとりの的確な対応が強く求められています。

なお, 『音楽教育学』42巻2号に「音楽教育と著作権」(山神清和氏, 特別寄稿)が掲載されています。昨秋の第43回大会では, 「倫理が問題になる根本的な部分」について「会員相互が認識の共有をはかる」ために, 「音楽教育研究におけるルールとは(2)一著作権を中心とした学習会一」(常任理事会企画, プロジェクト研究I)が行われました。山神氏は, この学習会の講演者として講演をお願いした専門家です。

●投稿締切を年4回とすることについて

編集委員会では, 投稿から掲載の期間の短縮化, 採否の結果通知の迅速化を図るための検討を進めています。投稿は年間を通していつでも受け付けています。このことは変わりません。ただ, 採否は対面の審議(年4回の編集委員会)で行うため, 投稿締切を委員会の開催日に合わせて年4回, 設定する方向で進めています。

●投稿について編集委員会からのお願い

- ・『音楽教育実践ジャーナル』への投稿申込みにあたって, 「自由投稿」か「特集投稿」かのどちらかを選択して, お書きください。
- ・採否の審議は, 投稿者の選択した投稿の「種類」に沿って行われます。「種類の希望」を適宜, 選択してください。
- ・投稿原稿は脚注ではなく, 「後注」で作成してください(印刷時に脚注となります)。引用・参考文献は注の後になります。注も, 引用・参考文献も, 「本文と同じサイズ」で原稿を作成してください。規定枚数に収まっているかの分量の算出のために, それが不可欠であることをどうぞご理解ください。

以上, ホームページ上の「投稿の手引き」をご参照いただき, 不明な点は, 事務局内編集委員会事務局にお問い合わせください。編集委員一同, よりよい学会誌の編集をめざして, 精一杯努めて参りますので, どうぞよろしくお願いいたします。

3-4 選挙管理委員会からお知らせ

選挙管理委員会委員長 中嶋俊夫

平成25年6月に実施されます「第21期日本音楽教育学会会長・理事選挙」について, 以下の通りお知らせします。

本選挙は, 日本音楽教育学会ホームページに掲載されている会則, 細則, 選挙管理委員会規定, 会長・理事選挙実施要領に則って実施されます。今後の日程ですが, まず5月末日に学会費納入状況から選挙人名簿を確定し, 6月中旬に投票用紙を含む選挙関連書類を郵送させていただきます。選挙実施方法の詳細につきましては, 選挙関連書類中の選挙公報でお知らせします。選挙についてご不明な点がございましたら, 選挙管理委員会(学会事務局内)までお問い合わせください。☞ E-mail: onkyoiku@remus.dti.ne.jp

会員各位の見識ある投票により, 学会のさらなる発展のためにふさわしい会長・理事が選出されますよう期待します。そのために選挙管理委員会では, 公正かつ正確な選挙事務を遂行できるよう努めてまいりますので, 皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

3-5 倫理綱領作成委員会からの報告

倫理綱領作成委員会 権藤 敦子

第 42, 43 回大会において、「音楽教育研究におけるルールとは」というタイトルのもと、「個人情報保護」「著作権」の学習会が行われました。講演、および、フロアとのやり取りを通して見えてきたのは、その根底に、「そこにかかわるすべての人の基本的人権の尊重とは?」「音楽教育における研究・実践の発展とは?」という二つの途方もなく大きな問いが存在することです。法令・規則を遵守し、社会通念に照らして良識ある行動をする、というだけでは実際にどう応えてよいのかわかりません。倫理綱領とは、音楽教育の研究・実践の諸活動のなかで、その問いにどう応えていくか目に見える形で共有する手がかりであり、その実現にむけてともに取り組んでいく指針であり、社会との信頼関係を築いていくための約束であるといえます。

倫理綱領作成委員会では、外部専門委員として、日本教育社会学会で『日本教育社会学会研究倫理宣言』の作成にかかわられた志水宏吉氏(大阪大学)にも加わっていただき、現在、綱領制定に向けた検討をさまざまな立場から慎重に行っています。また、具体的な事例に即したガイドブックを準備しています。学習会に寄せられたご質問も含めつつ、皆様にとって役に立つ手引きを目指しておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

4 事務局より

4-1 お知らせ

- (1) 第 44 回大会は、10 月 12 日(土)・13 日(日)に弘前大学で開催予定です。研究発表をご希望の方は、同封の応募要領をよく読んで Web からお申し込みください。発表申込み Web ページは 4 月下旬以降からスタートする予定です。今後、研究発表に関する情報は学会ホームページ上でお知らせをしていきます。多数のお申し込みをお待ちしております。
- (2) 年度会費の納入をお願いいたします。納入期限は 5 月 31 日です。期限内に会費を納めなければ、その後の送付物、研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。尚、2 年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。
- (3) 『音楽教育学』『音楽実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。お得なセット販売もおこなっております。詳しくはホームページをご覧ください。

重要なお願い

会員情報管理システムでは、皆様の E メールアドレスをご登録戴くことが重要です。まだご登録戴いていない方は、速やかに事務局にご連絡ください。



- ◎事務局開局時間 月・水・金 9:00~15:00
時間外のご用件は E-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp) へ
- ◎事務局員の異動
3 月末日まで: 亀山さやか・坂本友里・長山弘・大平奈緒
4 月以降: 亀山さやか・坂本友里・長山弘

.....【編集後記】.....

色とりどりの花が咲きそろう季節となりました。ニューズレター 51 号をお届けいたします。春休みは史料調査に出かけることが多く、息抜きとばかり、出先で一人のんびりお花見をするのも楽しみの一つです。今年度の自分を振り返りながら、新たな出会いを待つ春休み。この間に行われたさまざまなイベント、勉強会の様子なども「会員の窓」にお寄せいただければと思います。会員の皆様の声をお待ちしております。(大沼覚子)

また、新しい春がやってきました。「『春よ 来い』だね」と学生たちに話したら、「春よ、遠き春よ、臉とじればそこに～」と歌いだしました。私は「～赤い鼻緒のじょじょはいて、おんもへ出たいと待っている」だったのですが。皆様の春が素敵なお春でありますように。(小川容子)